植物医師

郷土喜劇

宮沢賢治

時　一九二〇年代

処　盛岡市郊外

人物　爾薩待（にさつたい）　正（ただし）　開業したての植物医師

ペンキ屋徒弟（とてい）

農民　一

農民　二

農民　三

農民　四

農民　五

農民　六

幕あく。

粗末なバラック室、卓子二、一は顕微鏡を載（の）せ一は客用、椅子（いす）二、爾薩待正　椅子に坐り心配そうに新聞を見て居る。立ってそわそわそこらを直したりする。

「今日はあ。」

「はぁい。」（爾薩待忙しく身づくろいする）

（ペンキ屋徒弟登場　看板を携（たずさ）える）

爾薩待「ああ、君か、出来たね。」

ペンキ屋（汗を拭きながら渡す）「あの、五円三十銭で

ございます。」

爾薩待「ああ、そうか。ずいぶん急がして済まなかったね。何せ今日から開業で、新聞にも広告したもんだからね。」

ペンキ屋「はあ、それでようございましょうか。」

爾薩待「ああ、いいとも、立派にできた。あのね、お金は月末まで待って呉(く)れ給(たま)え。」

ペンキ屋「あのう、実はどちらさまにも現金に願ってございますので。」

爾薩待「いや、それはそうだろう。けれどもね、ぼくも茲(ここ)でこうやって医者を開業してみれば、別に

夜逃げをする訳でもないんだから、月末まで待ってくれたまえ。」
ペンキ屋「ええ、ですけれど、そう言いつかって来たんですから。」
爾薩待「まあ、いいさ。僕だって、とにかくこうやって病院をはじめれば、まあ、院長じゃないか。五円いくらぐらいきっと払うよ。そうしてくれ給え。」
ペンキ屋「だって、病院だって、人の病院でもないんでしょう。」
爾薩待「勿論(もちろん)さ。植物病院さ。いまはもう外国ならど

この町だって植物病院はあるさ。ここではぼくがはじめだけれど。」

ペンキ屋「だって現金でないと私帰って叱られますから。そんなら代金引替ということにねがいます。」

（すばやく看板を奪う）

爾薩待「君、君、そう頑固なこと言うんじゃないよ。実は僕も困ってるんだ。先月まではぼくは県庁の耕地整理の方へ出てたんだ。ところが部長と喧嘩してね、そいつをぶんなぐってやめてしまったんだ。商売をやるたって金もないしね、

やっとその顕微鏡を友だちから借りてこの商売をはじめたんだ。同情してくれ給え。」

ペンキ屋「だって、そんな先月まで交通整理だかやっていて俄(にわ)かに医者なんかできるんですか。」

爾薩待「交通整理じゃないよ。耕地整理だよ。けれどもそりぁ、医者とはちがわぁね。しかしね、百姓のことなんざ何とでもごまかせるもんだよ。ぼく、きっとうまくやるから、まあ置いとけよ。置いとけよ。」

（また取り返す）

ペンキ屋「そうですか。そいじゃ月末にはどうか間ち

がいなく。困っちまうなあ。」
爾薩待「大丈夫さ。君を困らしぁしないよ。ありがとう、じゃ、さよなら。」
ペンキ屋徒弟退場。
「申し。」
爾薩待（居座（いずま）いを直し身繕（みづくろ）いする）「はあ。」
農民一（登場　枯れた陸稲（おかぼ）をもっている）「稲の伯楽（ばくろう）づのぁ、こっちだべすか。」
爾薩待「はあ、そうです。」
農民一「陸稲のごとでもわがるべすか。」
爾薩待「ああ、わかります。私は植物一切の医者です

から。」

農民一「はぁ、おりゃの陸稲ぁ、さっぱりおがらなぃです。この位になって、だんだん枯れはじめです、なじょにしたらいが、教えてくな※［＃小書き平仮名ん、228-12］せ。」（出す）

爾薩待（手にとって見る）「ははあ、あんまり乾き過ぎたな。」

農民一「いいえ、おりゃのあそごぁひでえ谷地（やじ）で、なんぼ旱（ひでり）でも土ぽさぽさづぐなるづごとのなぃどごだます。」

爾薩待「ははあ、あんまり水のはけないためだ。」

農民一（考える）「すた、去年なも、ずいぶん雨降りだたんとも、ずいぶんゆぐ穫（と）れだます、まんつ、おらあだりでば大谷地中（おおやぢうぢ）でおれのこれぁとったもの無ぃいがったます。」

爾薩待「ははあ、あんまり厚く蒔（ま）きすぎたな。」

農民一「厚ぐ蒔ぐて全体陸稲づもな、一反歩（いったんぶ）さなんぼごりゃ蒔げばいのす。」

爾薩待「さうですな。品種や土壌（どじょう）によりますがなあ、さうですなあ、陸稲一反歩となるというと、可成いろいろですがなあ、その塩水撰したやっとしないやつでもちがいますがなあ。」

農民一「はあ、その塩水撰したのです。」

爾薩待「ははあ、塩水撰した陸稲の種子（たね）と、土壌や肥料にもよりますがなあ。」

農民一「まんつ、あだり前のどごで、あだり前の肥料してす。」

爾薩待「そうですなあ、それは、ええと、あなたのあたりではなんぼぐらい播（ま）きます？」

農民一「まず一反歩四升だなす。おらもその位に播いだんす。」

爾薩待「ははあ、一反歩四升と。少し厚いようですなあ、三升八合ぐらいでしょうな。然し、あなた

のとこのは厚蒔のためでもないですなあ。そうすると、やっぱり肥料ですな。肥料があんまり少かったのでしょう。」

農民一「はぁ、まぁんつ、人並よりは、やったます。百刈りでば、まずおらぁあだり一反四畝（せ）なんだ、その百刈りさ、馬肥（うまごえ）、十五駄（だん）、豆粕（まめかす）一俵、硫安（りゅうあん）十貫目もやったます。」

爾薩待「あ、その硫安だ。硫安を濃くして掛けたでしょう。」

農民一「はあ、別段濃いど思わなぃがったが、全体なんぼ位に薄めたらいがべす。」

爾薩待「そうですな。硫安の薄め方となるとずいぶん
　　色々ですがなぁ、天気にもよりますしね。」
農民一「曇ってまず、土のさっと湿けだずぎだら、な
　　んぼこりゃにすたらいがべす。」
爾薩待「そうですな。またあんまり薄くてもいかんで
　　すな。あなたの処ではどれ位にします。」
農民一「まず肥桶（こえおけ）一杯の水さ、この位までて言うます。」
爾薩待「ええ、まあそうですね、けれども、これ位で
　　は少し多いかも知れませんね。まあ、こんなん
　　でしょうな。」（掌を少し小さくする）
農民一「はあ、せどなはおれぁは、もっと入れだます。」

爾薩待「そうですか。そうすればまぁ病気ですな。」

農民一「何病だべす。」

爾薩待（勿体（もったい）らしく顕微鏡に掛ける）「ははぁ、立枯病（たちがれびょう）ですな。立枯病です。ちゃんと見えています。立枯病です。」

農民一「はでな、病気よりも何が虫だなぃがべすか。」

爾薩待「虫もいますか。葉にですか。」

農民一「いいえ、根にす、小せぁ虫こぁ居るようだます。」

爾薩待「ああなるほど虫だ。ちゃんと根を食ったあとがある。これは病気と虫と両方です。主に虫の

方です。」

農民一「はあ、私もそうだと思ってあんすた。」

爾薩待（汗を拭（ふ）いてやっと安心という風）「ええ、そうですとも、これはもう明らかに虫です。しかも根切虫だということは極めて明白です。つまりこの稲は根切虫の害によって枯れたのですな。」

農民一「はあ、それで、その根切虫、無ぐするになじょにすたらいがべす。」

爾薩待「さうですなあ、虫を殺すとすればやっぱり亜砒酸（あひさん）などが一番いいですな。」

農民一「はあ、どこで売ってるべす。」

爾薩待「いや、それは私のとこが病院ですからな。私のとこにあります。いま上げます。」

農民一「はあ。」

爾薩待（立って薬瓶(くすりびん)をとる）「何反といいましたですか。」

農民一「五畝歩でごあんす。」

爾薩待「五畝歩とするとどれ位でいいかなあ。（しばらく考えてなあにくそという風）これ位でいいな。」（瓶のまま渡す）

農民一「あの虫のいないどごさも掛げるのすか。」

爾薩待（あわてる）「いや、それは、いたとこへだけか

けるのです。」

農民一「枯れだどごぁ半分ごりゃだんす。」

爾薩待「ああ、丁度その位へかけるだけです。」

農民一「水さなんぼごりゃ入れるのす。」

爾薩待「肥桶一つへまずこれ位ですなぁ。」

農民一「はあ、そうせば、よっぽど叮ねいに掛げないやないな。まんつお有難うごあんすな。すぐ行って掛げで見ら※［＃小書き平仮名ん、232-7］す。なんぼ上げだらいがべす。」

爾薩待「そうですな。診察料一円に薬価一円と、二円いただきます。」

農民一「はあ。」（財布から二円出す）

爾薩待（受取る）「やあ、ありがとう。」

農民一「どうもお有難うごあんした。これがらもどうがよろしぐお願いいいだしあんす。」

爾薩待「いや、さよなら。」（農民一　退場）

爾薩待（ほくほくして室の中を往来する）「ふん。亜砒酸は五十銭で一円五十銭もうけだ。これなら一向訳ないな。向こうから聞いた上でこっちは解決をつけてやる丈だから。」（硫安を入れるときの手付をする）「もうし。」

爾薩待「はい。」（農民二　登場）

農民二「植物医者づのぁお前さんだべすか。」

爾薩待「ええ、そうです。」

農民二「陸稲（おかぼ）のごとでもわがるべすか。」

爾薩待「ああわかります。私は植物一切の医者ですから。」

農民二「はあ、おりゃの陸稲ぁ、さっぱりおがらないです。この位になってだんだん枯れはじめです。」

爾薩待「ああ、そうですか。まあお掛けなさい。ええと、陸稲が枯れるんですか。」

農民二「はあ、斯う言うにならんす。」（出す）

爾薩待「ああ、なるほど、これはね、こいつはね、あんまり乾き過ぎたという訳でもない、また水はけの悪いためでもない。」

農民二「はあ、全ぐその通りだんす。」

爾薩待「そうでしょう。またあんまり厚く蒔き過ぎたというのでもない。まあ一反歩四升位蒔いたでしょう。」

農民二「そうでごあんす、そうでごあんす、丁度それ位蒔ぎあんすた。」

爾薩待「そうでしょう。また肥料があんまり少ないの

でもない。また硫安を追肥（ついひ）するのに濃過（こす）ぎたの
でもない。まあ肥桶（こえおけ）一つにこれ位入れたでしょ
う。」

農民二「はあ、そうでごあんす、そうでごあんす。」

爾薩待「そうでしょう、またこれは病気でもない。ぼ
く考えるに、どうです、これ位ぐらいのこんな
虫が根についちゃいませんか。」

農民二「はあ、おりあんす、おりあんす。」

爾薩待「なるほど、そうでしょう。そいつがいかんの
です。」

農民二「なじょにすたらいがべす。」

爾薩待「それはね、亜砒酸（あひさん）という薬をかけるんです。」

農民二「どごで売ってべす。」

爾薩待「いや、勿論私のところにあるのですがね、いまちょっと切れていますから、証明書を書いて上げます。（書く）これをもって町の薬屋から買っておいでなさい。硫安と同じ位に薄めて使うんです。」

農民二「はあ、こいづ持ってて薬買って薄めで掛けるのだなす。」

爾薩待「そうです。」

農民二「なんぼお礼上げだらいがべす。」

爾薩待「診察料は一円です。それから証明書代が五十
　銭です。」
農民二「一円五十銭だなす。（金を出す）さあ、どうも
　おありがどごあんすた。」
爾薩待「いや、ありがとう。さよなら。」
　農民二　退場
　農民三　登場
農民三「今朝新聞さ広告出はてら植物医者づのぁ、お
　前さんだべすか。」
爾薩待「ああ、そうです。何かご用ですか。」

農民三「おれぁの陸稲ぁ、さっぱりおがらないです。」

爾薩待「ええ、ええ、それはね、疾(と)うから私は気が付いていましたが、針金虫の害です。」

農民三「なじょにすたらいがべす。」

爾薩待「それはね、亜砒酸(あひさん)を掛けるんです。いま私が証明書を書いてあげますから、これを持って薬店へ行って亜砒酸を買って肥桶一つにこれ位ぐらい入れて稲にかけるんです。」

（証明書を書く、渡す）

農民三「はあ、そうですか。おありがどごあんす。なんぼ上げ申したらいがべす。」

爾薩待「一円五十銭です。」

（金を出す）

農民三「どうもおありがどごあんすた。」

爾薩待「いや、ありがとう。さよなら。」（農民三　退場）

農民四、五　登場。

爾薩待「いや、今日は、私は植物医師、爾薩待（にさつたい）です。あなた方は陸稲の枯れたことに就（つ）いて相談においでになったのでしょう。それは針金虫の害です。亜砒酸をおかけなさい。いま証明書を書いてあげます。」（書く）

農民四、五（驚嘆（きょうたん）す）この人ぁ医者ばかりだなぃ。八卦（はっけ）も置ぐようだじゃ。」

爾薩待「ここに証明書がありますからね、こいつをもって薬屋へ行って亜砒酸を買って、水へとかして稲に掛けるんです。ええと、お二人で三円下さい。」

農民四、五「どうもおありがどごあんすた。」

爾薩待「ええ、さよなら。」

農民六　登場。

爾薩待「ああ、（証明書を書く）この証明書を持って薬屋へ行って亜砒酸を買って水へとかしてあなた

の陸稲へおかけなさい。すっかり直りますから。
その代り一円五十銭置いてって下さい。」
農民六（おじぎ、金を渡す。去る）
爾薩待（独語）「どうだ。開業早々（そうそう）からこううまく行くとは思わなかったなあ。半日で十円になる。看板代などはなんでもない。もう七人目のやつが来そうなもんだがなあ。」
「今日は。」
「はい。」（農民一　登場）
爾薩待「いや、今日は。私は植物医師の爾薩待です。あなたの陸稲はすっかり枯れたでしょう。」

農民一「はあ。」

爾薩待「それはね、あんまり乾き過ぎたためでもない、あんまり湿り過ぎたためでもない。厚く蒔きすぎたのでもない。まあ一反歩四升ぐらい播いたのでしょう。」

農民一「はあ。」

爾薩待「それでいいのです。また肥料のあまり少ないのでもない。硫安を濃くしてかけたのでもない。肥桶一つへこれ位入れたでしょう。」

農民一「はあ。」

爾薩待「そこでね、それは針金虫というものの害なの

です。それをなくするには亜砒酸を水にとかしてかけるのです。」
農民一「はあ、私そうしあんした。」
爾薩待（顔を見て愕く）「おや、あなたはさっきの方ですね。こついは失敬しました。どうでした。」
農民一「どうも、ゆぐないよだんすじゃ。かげだれば、稲見でるうぢに赤ぐなってしまたもす。」
爾薩待（あわてる）「いや、そんな筈はありません。それは掛けようが悪いのです。」
農民一「掛げよう悪たてお前さんの言うようにすたます。」

爾薩待「いや、そうでないです。第一、日中に掛ける
　　　ということがありますか。」
農民一「はでな、そいづお前さん言わないんだもな。」
爾薩待「言わないたって知れてるじゃありませんか。
　　　いやになっちまうな。」
　　　「申し。」（農民二　登場）
農民二「陸稲（おかぼ）さっぱり枯れでしまったます。」
爾薩待「だからね、今も言ってるんだ、こんな天気の
　　　まっ盛りに肥料にしろ薬剤にしろかけるという
　　　筈はないんだ。」
農民二「何したどす。お前さん、今行ってすぐ掛げろっ

て言ったけぁか。」

爾薩待「それは言った。言ったけれども、君たちのやったようでなく、噴霧器(ふんむき)を使わないといけないんだ。」

農民一「虫も死ぬ位だから陸稲さも悪いのでぁあるまぃが。」

農民二「どうもそうだようだます。」

爾薩待「いや、そんなことはない。ちゃんと処方(しょほう)通りやればうまく行ったんだ。」

「今日は。」（農民三　登場）

農民三「先生、あの薬わがなぃ。さっぱり稲枯れるも

の。」
爾薩待「いや、それはね、今も言ってたんだが、噴霧器を使わずに、この日中やったのがいけなかったのだ。」
農民三「はぁでな、お前さま、おれさ町ねいに柄杓で（ていねいに、ひしゃく）かげろて言ったただないすか。」
爾薩待「いやいや、それはね、……。」
農民二「なあに、この人、まるでさっきたがら、いいこりゃ加減だもさ。」
農民一「あんまり出来さないよだね。」
（医師しおれる）

農民四、五、六　登場

農民四「じゃ、この野郎（やろう）、山師たがりだじゃぃ。まるきり稲枯れでしまたな。」

農民五「ひでやづだじゃ。春から汗水たらすて、ようやぐ物にすたの、二百刈りづもの、まるっきり枯らしてしまったな。」

農民六「ほんとにひで野郎だ。」

農民二「全体、はじめの話がら、ひょんただただもな。じゃ、うな、医者だなんて、人がら銭まで取って、人の稲枯らして済むもんだが。」

爾薩待（うなだれる）

（農民等　黙然（もくねん））

農民二（ややあって）「いま、もぐり歯医者でも懲役（ちょうえき）になるもの、人欺（だま）して、こったなごとしてそれで通るづ筈なぃがべじゃ。」

爾薩待（いよいよしょげる。）

農民二「六人さ、まるっきり同じごと言って偽（うそ）こいで、そしてで威張って、診察料よごせだ、全体、何の話だりゃ。」

爾薩待（いよいよしおれる）

農民一（気の毒になる）「じゃ、あんまりそう言うなじゃ、人の医者だて治るごともあれば、療治後（おく）れれば

死ぬごともあるだ。あんまりそう言うなじゃ。」

農民三「まぁんつ、運悪がたとあぎらめなぃやなぃな。ひでりさ一年かがたど思たらいがべ。」

農民四「全体、みんな同じ陸稲だったがら悪がったもな。ほがのものもあれば、治る人もあったんだとも。あっはっは。」

農民五「さあ、あべじゃ。医者さんもあんまり、がおれなぃで、折角（せっかく）みっしりやったらいがべ。」

農民六「ようし、仕方なぃがべ。さあ、さっぱりどあぎらめべ。じゃ、医者さん、まだ頼む人もあるだ、あんまり、がおらなぃでおでぁれ。」

農民二「さあ、行ぐべ。どうもおありがどごあんすた。」

一同退場　医師これを見送る。

（幕）

底本：「銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社
　　１９６１（昭和36）年７月30日発行
　　１９７９（昭和54）年６月５日40刷
入力：蒋龍
校正：土屋隆
２００４年７月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。